



伝法院



雷門

②④雷門
平安時代天慶5年(942年)に平公雅によって駒形付近に創建された。高さ3.9mの提灯や「金龍山」額がある。

蔵前神社
(台東区蔵前3-14-11 蔵前神社)
落語「元犬」の舞台。以前は蔵前八幡神社といっていた。江戸城鬼門除けとして五代将軍綱吉が京都山城より石清水八幡宮を勧進奉斎したのが始まりで、昭和26年3月蔵前神社と名を変えている。相撲とは縁が深く、天明年間には、大関谷風や関脇小野川が、寛政年間には大関雷電などの名力士もここで活躍した。天明2年(1782)2月場所7日目、安政7年(1778)以来実に63連勝中の谷風が新進の小野川に「渡し込み」で取れた一番は江戸中を騒がせた。現在の『縦番付』は宝暦7年10月、蔵前神社で開催された本場所から始まった。宝暦11年(1761)10月場所より従来の勧進相撲が『勧進大相撲』になり、その後の「全勝負け付」も現存している。明治時代には「花相撲」も行われた。勧進大相撲が宝暦7年(1757)10月に始まり文政と約70年の間に、ここで23回行われ、両国回向院、深川八幡宮、ここ石清水八幡宮が三大拠点の一つであった。当時は広かったが今は狭くて人々が集まれるだけの境内が無い。

松平西福寺
慶長3年(1598)徳川秀忠によって開基。開山上人の了伝は戦場で常に家康を助けたので、松平の号がある。武田信玄の女で家康の側室となった竹姫こと良雲院の菩提寺。門を入れて左に、浮世絵の勝川春章の墓があり、寛政4年(1792)の銘がある。また、市村座座主高木秀吉が密葬した彰義隊士132名の供養塔があり、「南無阿弥陀仏」と刻まれている。

法林寺(高富谷墓)
法林寺には高富谷の墓があります。一蝶風の風俗画を得意としたが、のちには、武者絵に新境地を開いた。浅草寺に現存する大絵馬「源三位頼政退治図」は、天明7年(1787)の制作で、高富の代表作のひとつ。文化元年(1804)8月、75歳で没し、当寺に葬られた。なお、墓所は非公開である。(台東区教育委員会)

鳥越神社
白雉2年(651)、日本大和武尊を祀って白鳥神社と称したのに始まること、小高い丘に建てていた。前九年の役(1051)の際、源義家がこの地を訪れ鳥越大明神と改めたと伝えられる。「戸名所図会」が「昔時は社寺極めて広く、今の森田町、旅館町辺より三味線堀に及び三味線堀は実に之が御手洗なりしと伝ふ」(東京案内)鳥越神社の丘は浅草御蔵を造るさい、切り崩された。

蔵前閻魔堂
閻魔の頭を彫ったのは仏師清左衛門で、盆と正月にレプリカから本物にすげ替えられる。(円生談)閻魔堂の本尊は蓮慶作の閻魔大王で1丈6尺(約4.8m)の大きなものであった。と伝わっていますので、円生の噂は作り話です。ここは、1月と7月の敷入りの15、16日に縁日が開かれ、表通りの天王橋(須賀橋)まで露天が並び多くの参拝者で賑わった。しかし、関東大震災で蓮慶の閻魔大王とお堂が焼失。杉並区に移転したが、これも大空襲で焼けたが新しい本尊は戦災から免れた天台宗華徳院(杉並区松ノ木3-32-11)に安置されています。閻魔堂跡は須賀神社の裏側にその跡を残しています。小さな碑が玩具会館の脇に建っています。(閻魔堂跡。浅草橋2丁目28-14玩具会館)(HP落語の舞台を歩くより)



浅草寺

⑨金龍山浅草寺
628年綱にかかった聖観音菩薩を祀ったのがはじまりで、都内最古の寺です。近辺は禁漁区となった。江戸時代は200近くの神仏が鎮座し、多くの参詣者が訪れて民衆信仰の中心地として、大変賑わっています。
【主な見どころ】
雷門、仲見世、弁天山(時の鐘・芭蕉句碑)、伝法院、五重塔、仁王門(宝蔵門)、六角堂本堂、随新門(二天門)、二社権現(浅草神社)、奥山など

権寺(正覚寺)
天正年間(1573~1593)、寺を訪ねた山伏が住職に基で勝ち、境内の権(かや)の実をもらったら、その後実はならなくなった。再び山伏が現れ自分は天狗であるといつて実を返した。以後権の木に実がなるようになった。享保(1716~1736)の台風で木は折れ、今は根株だけが残っている。狂歌の宿屋飯盛こと石川雅望、娘義太夫の初代竹本綾之介、大正末期のもらい子殺しのお初、洋画家安井曾太郎、横綱安藝ノ海などの墓がある。

龍寶寺
川柳の祖初代「柄井川柳(からいせんりゅう)」の墓がある。俳句から狂句を独立させ、ついに無季の狂句は彼の名をとって川柳と呼ばれるようになったのである。「木枯や跡で芽をふけ川柳(かわやなぎ)」の句碑がある。別名「川柳寺」と呼ばれている。

浄念寺
幕府の御書院番を勤め、文政9年(1826)幕令によって江戸の地誌『御府内風土記稿』を編纂した三島政行の墓がある。「新編武蔵風土記稿」にも従事している。横綱千代の山の墓がある。

鳥越神社
白雉2年(651)、日本大和武尊を祀って白鳥神社と称したのに始まること、小高い丘に建てていた。前九年の役(1051)の際、源義家がこの地を訪れ鳥越大明神と改めたと伝えられる。「戸名所図会」が「昔時は社寺極めて広く、今の森田町、旅館町辺より三味線堀に及び三味線堀は実に之が御手洗なりしと伝ふ」(東京案内)鳥越神社の丘は浅草御蔵を造るさい、切り崩された。

蔵前閻魔堂
閻魔の頭を彫ったのは仏師清左衛門で、盆と正月にレプリカから本物にすげ替えられる。(円生談)閻魔堂の本尊は蓮慶作の閻魔大王で1丈6尺(約4.8m)の大きなものであった。と伝わっていますので、円生の噂は作り話です。ここは、1月と7月の敷入りの15、16日に縁日が開かれ、表通りの天王橋(須賀橋)まで露天が並び多くの参拝者で賑わった。しかし、関東大震災で蓮慶の閻魔大王とお堂が焼失。杉並区に移転したが、これも大空襲で焼けたが新しい本尊は戦災から免れた天台宗華徳院(杉並区松ノ木3-32-11)に安置されています。閻魔堂跡は須賀神社の裏側にその跡を残しています。小さな碑が玩具会館の脇に建っています。(閻魔堂跡。浅草橋2丁目28-14玩具会館)(HP落語の舞台を歩くより)

1 浅草一里塚
日本橋から最初の一里塚。痕跡なし。所在不明。「増補行程記」には、「塚なし一里塚・花川戸と聖天町の間・此処一里塚有と記候・伊家は相見得申候」とあり、花川戸近辺に塚があったという。天保15年(1844年)の「日光道中宿村大概帳」の「浅草茶屋町三番地に至りて日本橋より一里、此に第一の標木を建つ」が根拠で、茶屋町が現観光センター付近が塚の跡地だという説とがある。

うなぎの前川
創業は文化・文政期(約200年前)。もとは川魚問屋でしたが、初代勇右衛門が鰻料理屋を開きました。大川の前に店を構えたことから屋号を「前川」とした。中州から舟で柳橋に遊び、前川に立ち寄って蒲焼きを食べ、さらに水神へ廻っていました。関東大震災の後、現在の場所に移りました。

駒形どぜう
創業は享和元年(1801)。初代越後屋助七は武蔵国(現埼玉県北葛飾郡)の出身で、18歳の時に江戸に出て奉公した後、浅草駒形にめし屋を開店。浅草寺への参詣の客で繁盛した。初代がどぜうなべ・どぜう汁をつくり、二代目助七がくじらなべを売り出した。嘉永元年(1848年)に出された「江戸名物酒飯手引草」に名が記されていた。「神興まつまのどぜう汁すゝりけり」浅草ッ子、久保田万太郎の句碑がある。

紙漉町跡(現在の雷門5-1)
江戸における最初の紙漉きが行われた場所。延宝4年(1676)版の「江戸絵図」には田原町1丁目の西側の道に「カミスキ丁」と記され、貞亨4年(1687)刊「江戸鹿子」にも「紙すき町」の名が見える。また、安永2年(1773)に成立した「江戸図説」によると、田原町のほかに橋場・鳥越や足立区千住方面でも生産されていた。

御蔵河岸跡
蔵橋から100mほど南に「御蔵の渡し」があり、対岸から遊びに来る人が多かった。御蔵の渡しが廃止になり蔵橋が架けられた。「オ蔵カシ渡シ場」(切絵図)名前の由来は、江戸の初めころ現在の墨田区本所に幕府の御蔵があった。

首尾の松
御蔵四番堀と五番堀の間にあり見事な枝で隅田川を行き来する船の目印となっていた。名前の由来は諸説があるが、吉原帰りの客が首尾(遊びの結果)を語り合った場所がこの首尾の松とある。

須賀神社(すがじんじや)
「祇園社(ぎおんのやしろ)」「当社牛頭(ごず)天王は天曆年中(949~957)の鎮座なりとぞ。大倉前の総鎮守にして別当を大円寺と号す。」(江戸名所図会)というが、俗に団子天王と呼ばれていた。大倉前というのは浅草御蔵のこと。創建は「當社牛頭天王縁起」によれば推古天皇の御代(西暦600年)江戸時代には「須賀社。蔵前牛頭天王、団子天王、笹団子天王、などと呼ばれ、経済力のある氏子の札差ら(米商人)に支えられ、祭礼も盛大であったようす。明治時代の神仏分離令により、天台宗東叡山寛永寺真鏡山宝現院大円寺より分離され須賀神社と改名され、古社です。関東大震災、第二次世界大戦の焼失のため昭和36年造営の鉄筋コンクリート社殿です。

②⑧弁天山「時の鐘」
浅草寺境内から除夜の鐘を響かせる弁天山の「時の鐘」は、元禄5年(1692)に5代将軍徳川綱吉の命により作られた。鐘の大きさは龍頭、鐘身あわせて総高2.12m口径1.16m直径1.52m。1945年の空襲で戦火を浴びるが無事に残り、鐘楼は焼け落ちたため1950年に再建された。松尾芭蕉の句「花の雲鐘は上野が浅草か」

②⑥東武鉄道浅草駅
隅田川のほとりに賑わう浅草寺の門前町の玄関口。旧浅草駅は現在の業平橋にあり、現在の浅草駅は昭和6年に延長され「浅草雷門駅」として誕生。昭和20年に「浅草駅」に改称。

②⑤仲見世
徳川家康が江戸幕府を開いてから始まり、最も古い商店街の一つといわれています。「二十軒茶屋は歌仙茶屋ともいへり。昔はこの所の茶店には御福の茶まわれとて、参詣の人を呼びたるとぞ。今はその家のかず二十余軒ある故に、俗をよんで二十軒茶屋といひならわし。」二十軒茶屋は、浅草寺境内(現在の仲店の中程)にあった茶屋の総称で、20軒並んでいたから名といひます。寛文(1661~73)以前からあったといわれ、もとは36軒の茶店があったので、三十六歌仙にちなんで歌仙茶屋と呼ばれ、享保初め頃(1716年頃)20軒になり、天保以降は10軒になりましたが、名称は二十軒茶屋のまま明治18年まで続いたそうです。

②④紙漉町跡(現在の雷門5-1)
江戸における最初の紙漉きが行われた場所。延宝4年(1676)版の「江戸絵図」には田原町1丁目の西側の道に「カミスキ丁」と記され、貞亨4年(1687)刊「江戸鹿子」にも「紙すき町」の名が見える。また、安永2年(1773)に成立した「江戸図説」によると、田原町のほかに橋場・鳥越や足立区千住方面でも生産されていた。

御蔵河岸跡
蔵橋から100mほど南に「御蔵の渡し」があり、対岸から遊びに来る人が多かった。御蔵の渡しが廃止になり蔵橋が架けられた。「オ蔵カシ渡シ場」(切絵図)名前の由来は、江戸の初めころ現在の墨田区本所に幕府の御蔵があった。

首尾の松
御蔵四番堀と五番堀の間にあり見事な枝で隅田川を行き来する船の目印となっていた。名前の由来は諸説があるが、吉原帰りの客が首尾(遊びの結果)を語り合った場所がこの首尾の松とある。

須賀神社(すがじんじや)
「祇園社(ぎおんのやしろ)」「当社牛頭(ごず)天王は天曆年中(949~957)の鎮座なりとぞ。大倉前の総鎮守にして別当を大円寺と号す。」(江戸名所図会)というが、俗に団子天王と呼ばれていた。大倉前というのは浅草御蔵のこと。創建は「當社牛頭天王縁起」によれば推古天皇の御代(西暦600年)江戸時代には「須賀社。蔵前牛頭天王、団子天王、笹団子天王、などと呼ばれ、経済力のある氏子の札差ら(米商人)に支えられ、祭礼も盛大であったようす。明治時代の神仏分離令により、天台宗東叡山寛永寺真鏡山宝現院大円寺より分離され須賀神社と改名され、古社です。関東大震災、第二次世界大戦の焼失のため昭和36年造営の鉄筋コンクリート社殿です。

須賀神社(すがじんじや)
「祇園社(ぎおんのやしろ)」「当社牛頭(ごず)天王は天曆年中(949~957)の鎮座なりとぞ。大倉前の総鎮守にして別当を大円寺と号す。」(江戸名所図会)というが、俗に団子天王と呼ばれていた。大倉前というのは浅草御蔵のこと。創建は「當社牛頭天王縁起」によれば推古天皇の御代(西暦600年)江戸時代には「須賀社。蔵前牛頭天王、団子天王、笹団子天王、などと呼ばれ、経済力のある氏子の札差ら(米商人)に支えられ、祭礼も盛大であったようす。明治時代の神仏分離令により、天台宗東叡山寛永寺真鏡山宝現院大円寺より分離され須賀神社と改名され、古社です。関東大震災、第二次世界大戦の焼失のため昭和36年造営の鉄筋コンクリート社殿です。



②⑤仲見世
徳川家康が江戸幕府を開いてから始まり、最も古い商店街の一つといわれています。「二十軒茶屋は歌仙茶屋ともいへり。昔はこの所の茶店には御福の茶まわれとて、参詣の人を呼びたるとぞ。今はその家のかず二十余軒ある故に、俗をよんで二十軒茶屋といひならわし。」二十軒茶屋は、浅草寺境内(現在の仲店の中程)にあった茶屋の総称で、20軒並んでいたから名といひます。寛文(1661~73)以前からあったといわれ、もとは36軒の茶店があったので、三十六歌仙にちなんで歌仙茶屋と呼ばれ、享保初め頃(1716年頃)20軒になり、天保以降は10軒になりましたが、名称は二十軒茶屋のまま明治18年まで続いたそうです。

②④紙漉町跡(現在の雷門5-1)
江戸における最初の紙漉きが行われた場所。延宝4年(1676)版の「江戸絵図」には田原町1丁目の西側の道に「カミスキ丁」と記され、貞亨4年(1687)刊「江戸鹿子」にも「紙すき町」の名が見える。また、安永2年(1773)に成立した「江戸図説」によると、田原町のほかに橋場・鳥越や足立区千住方面でも生産されていた。

御蔵河岸跡
蔵橋から100mほど南に「御蔵の渡し」があり、対岸から遊びに来る人が多かった。御蔵の渡しが廃止になり蔵橋が架けられた。「オ蔵カシ渡シ場」(切絵図)名前の由来は、江戸の初めころ現在の墨田区本所に幕府の御蔵があった。

首尾の松
御蔵四番堀と五番堀の間にあり見事な枝で隅田川を行き来する船の目印となっていた。名前の由来は諸説があるが、吉原帰りの客が首尾(遊びの結果)を語り合った場所がこの首尾の松とある。

須賀神社(すがじんじや)
「祇園社(ぎおんのやしろ)」「当社牛頭(ごず)天王は天曆年中(949~957)の鎮座なりとぞ。大倉前の総鎮守にして別当を大円寺と号す。」(江戸名所図会)というが、俗に団子天王と呼ばれていた。大倉前というのは浅草御蔵のこと。創建は「當社牛頭天王縁起」によれば推古天皇の御代(西暦600年)江戸時代には「須賀社。蔵前牛頭天王、団子天王、笹団子天王、などと呼ばれ、経済力のある氏子の札差ら(米商人)に支えられ、祭礼も盛大であったようす。明治時代の神仏分離令により、天台宗東叡山寛永寺真鏡山宝現院大円寺より分離され須賀神社と改名され、古社です。関東大震災、第二次世界大戦の焼失のため昭和36年造営の鉄筋コンクリート社殿です。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

③①二天門
東照宮(後に江戸城内へ遷座)の「隨身門」として本堂の東側に江戸時代元和4年(1618年)に建立されました。

浅草紙
後水尾天皇(1611~1629)は宮中で使用した紙を年末に燃やしているのを見て「無駄なことを」として漉き直しさせた。「江戸千住近在の民は、漉き返し紙を製する」と毎年十両に及び(文政10年1827年佐藤信淵『経済要録』)「村民戸ごと世にいう浅草紙といふものを漉きて生産の資とす。…(中略)農隙に浅草紙といへる紙を漉きて江戸にひさげり」「新編武蔵国風土記稿」この再生紙を千手の紙問屋「横山家」(B参照)が集荷し浅草に集中していた紙問屋を通して売りました。浅草紙は再生紙で「還魂紙」と「並六」と呼ばれ、用途はその品質から「落とし紙」、「まくそがみ」などと呼ばれ、いわゆる便所紙とした。

浅草紙
後水尾天皇(1611~1629)は宮中で使用した紙を年末に燃やしているのを見て「無駄なことを」として漉き直しさせた。「江戸千住近在の民は、漉き返し紙を製する」と毎年十両に及び(文政10年1827年佐藤信淵『経済要録』)「村民戸ごと世にいう浅草紙といふものを漉きて生産の資とす。…(中略)農隙に浅草紙といへる紙を漉きて江戸にひさげり」「新編武蔵国風土記稿」この再生紙を千手の紙問屋「横山家」(B参照)が集荷し浅草に集中していた紙問屋を通して売りました。浅草紙は再生紙で「還魂紙」と「並六」と呼ばれ、用途はその品質から「落とし紙」、「まくそがみ」などと呼ばれ、いわゆる便所紙とした。

浅草紙
後水尾天皇(1611~1629)は宮中で使用した紙を年末に燃やしているのを見て「無駄なことを」として漉き直しさせた。「江戸千住近在の民は、漉き返し紙を製する」と毎年十両に及び(文政10年1827年佐藤信淵『経済要録』)「村民戸ごと世にいう浅草紙といふものを漉きて生産の資とす。…(中略)農隙に浅草紙といへる紙を漉きて江戸にひさげり」「新編武蔵国風土記稿」この再生紙を千手の紙問屋「横山家」(B参照)が集荷し浅草に集中していた紙問屋を通して売りました。浅草紙は再生紙で「還魂紙」と「並六」と呼ばれ、用途はその品質から「落とし紙」、「まくそがみ」などと呼ばれ、いわゆる便所紙とした。

浅草紙
後水尾天皇(1611~1629)は宮中で使用した紙を年末に燃やしているのを見て「無駄なことを」として漉き直しさせた。「江戸千住近在の民は、漉き返し紙を製する」と毎年十両に及び(文政10年1827年佐藤信淵『経済要録』)「村民戸ごと世にいう浅草紙といふものを漉きて生産の資とす。…(中略)農隙に浅草紙といへる紙を漉きて江戸にひさげり」「新編武蔵国風土記稿」この再生紙を千手の紙問屋「横山家」(B参照)が集荷し浅草に集中していた紙問屋を通して売りました。浅草紙は再生紙で「還魂紙」と「並六」と呼ばれ、用途はその品質から「落とし紙」、「まくそがみ」などと呼ばれ、いわゆる便所紙とした。

浅草紙
後水尾天皇(1611~1629)は宮中で使用した紙を年末に燃やしているのを見て「無駄なことを」として漉き直しさせた。「江戸千住近在の民は、漉き返し紙を製する」と毎年十両に及び(文政10年1827年佐藤信淵『経済要録』)「村民戸ごと世にいう浅草紙といふものを漉きて生産の資とす。…(中略)農隙に浅草紙といへる紙を漉きて江戸にひさげり」「新編武蔵国風土記稿」この再生紙を千手の紙問屋「横山家」(B参照)が集荷し浅草に集中していた紙問屋を通して売りました。浅草紙は再生紙で「還魂紙」と「並六」と呼ばれ、用途はその品質から「落とし紙」、「まくそがみ」などと呼ばれ、いわゆる便所紙とした。

浅草紙
後水尾天皇(1611~1629)は宮中で使用した紙を年末に燃やしているのを見て「無駄なことを」として漉き直しさせた。「江戸千住近在の民は、漉き返し紙を製する」と毎年十両に及び(文政10年1827年佐藤信淵『経済要録』)「村民戸ごと世にいう浅草紙といふものを漉きて生産の資とす。…(中略)農隙に浅草紙といへる紙を漉きて江戸にひさげり」「新編武蔵国風土記稿」この再生紙を千手の紙問屋「横山家」(B参照)が集荷し浅草に集中していた紙問屋を通して売りました。浅草紙は再生紙で「還魂紙」と「並六」と呼ばれ、用途はその品質から「落とし紙」、「まくそがみ」などと呼ばれ、いわゆる便所紙とした。

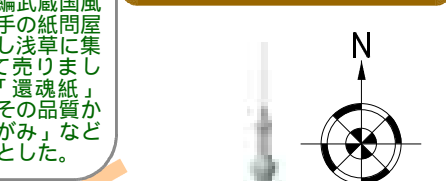
浅草紙
後水尾天皇(1611~1629)は宮中で使用した紙を年末に燃やしているのを見て「無駄なことを」として漉き直しさせた。「江戸千住近在の民は、漉き返し紙を製する」と毎年十両に及び(文政10年1827年佐藤信淵『経済要録』)「村民戸ごと世にいう浅草紙といふものを漉きて生産の資とす。…(中略)農隙に浅草紙といへる紙を漉きて江戸にひさげり」「新編武蔵国風土記稿」この再生紙を千手の紙問屋「横山家」(B参照)が集荷し浅草に集中していた紙問屋を通して売りました。浅草紙は再生紙で「還魂紙」と「並六」と呼ばれ、用途はその品質から「落とし紙」、「まくそがみ」などと呼ばれ、いわゆる便所紙とした。

浅草紙
後水尾天皇(1611~1629)は宮中で使用した紙を年末に燃やしているのを見て「無駄なことを」として漉き直しさせた。「江戸千住近在の民は、漉き返し紙を製する」と毎年十両に及び(文政10年1827年佐藤信淵『経済要録』)「村民戸ごと世にいう浅草紙といふものを漉きて生産の資とす。…(中略)農隙に浅草紙といへる紙を漉きて江戸にひさげり」「新編武蔵国風土記稿」この再生紙を千手の紙問屋「横山家」(B参照)が集荷し浅草に集中していた紙問屋を通して売りました。浅草紙は再生紙で「還魂紙」と「並六」と呼ばれ、用途はその品質から「落とし紙」、「まくそがみ」などと呼ばれ、いわゆる便所紙とした。

浅草紙
後水尾天皇(1611~1629)は宮中で使用した紙を年末に燃やしているのを見て「無駄なことを」として漉き直しさせた。「江戸千住近在の民は、漉き返し紙を製する」と毎年十両に及び(文政10年1827年佐藤信淵『経済要録』)「村民戸ごと世にいう浅草紙といふものを漉きて生産の資とす。…(中略)農隙に浅草紙といへる紙を漉きて江戸にひさげり」「新編武蔵国風土記稿」この再生紙を千手の紙問屋「横山家」(B参照)が集荷し浅草に集中していた紙問屋を通して売りました。浅草紙は再生紙で「還魂紙」と「並六」と呼ばれ、用途はその品質から「落とし紙」、「まくそがみ」などと呼ばれ、いわゆる便所紙とした。

浅草紙
後水尾天皇(1611~1629)は宮中で使用した紙を年末に燃やしているのを見て「無駄なことを」として漉き直しさせた。「江戸千住近在の民は、漉き返し紙を製する」と毎年十両に及び(文政10年1827年佐藤信淵『経済要録』)「村民戸ごと世にいう浅草紙といふものを漉きて生産の資とす。…(中略)農隙に浅草紙といへる紙を漉きて江戸にひさげり」「新編武蔵国風土記稿」この再生紙を千手の紙問屋「横山家」(B参照)が集荷し浅草に集中していた紙問屋を通して売りました。浅草紙は再生紙で「還魂紙」と「並六」と呼ばれ、用途はその品質から「落とし紙」、「まくそがみ」などと呼ばれ、いわゆる便所紙とした。

2 日本橋~千住宿
東京都台東区
浅草橋~浅草
(歩行距離 2172m 26分)
歩く地図でたどる日光街道
http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp



スカイツリーから京成押上駅375m 5分

⑦東京スカイツリー
全高(尖塔高)634mは日光東照宮五重の塔より少し下の位置にあたる、軒高(塔本体の屋上の高さ)497mは自立式鉄塔としてはキエフテレビ塔の385mを上回る世界第1位。現存する電波塔としてはKVLY-TV塔の628.8mを上回る世界第1位。2011年11月17日に世界一高いタワーとしてギネス世界記録の認定を受けた。人工の建造物としてはブルジュ・ハリファの828mに次ぐ世界第2位となる。

浅草の地名の由来
「往古、草深い武蔵野の中で浅草の一画は茅や芝草ばかり浅々と生い茂っていた草原だったので、京都の深草と対比して浅草の地名が生まれたのであろう」(明治初期発行「東京府志料」)。「武蔵野の末にて草もおのづから浅々しき故浅草と云いしなるべし」(朝日新聞「東京地名考」)。

雷おこしの由来
名前の由来は、「雷門」と「家を起こす」「名を起こす」をかけたもの。江戸時代後期に、浅草雷門近くの露天商が縁起物として売り始めたのが発祥と言われ、浅草名物の土産物として知られる。さくさくとした食感が特徴。

浅草天文台
渋川春海が天文方に任じられた翌貞享2年(1685年)に牛込藁町の地に司天台を設置した。曆術・測量・地誌編纂・洋書翻訳などを行った。元禄2年(1689年)に本所、同14年(1701年)に神田駿河台に移転。春海の没後、延享3年(1746年)に神田佐久間町、明和2年(1765年)に牛込袋町に移り、天明2年(1782年)に浅草の浅草天文台(顔磨所とも)に移った。この時に「天文台」という呼称が初めて採用。高橋至時や間重富が寛政の改暦に従事したのは牛込袋町・浅草時代であり、伊能忠敬が高橋至時の元で天文学・測量学を学んだのも浅草天文台であった。その後、天保13年(1842年)に渋川景祐らの尽力で九段坂上にもう一つの天文台が設置されて天体観測に従事した。明治2年(1869年)に天文方とともに浅草・九段の両天文台が廃止される事になる。

鳥越橋跡
不忍池から忍川を流れた水が、三味線堀を經由して、現在の蔵前橋通りの鳥越川から隅田川へと通じていた。三味線堀は、蔵前通りを西に行き、現在の清洲橋通りに面して、小島1丁目の西端に南北に広がっていた。寛永7年(1630)に鳥越川を掘り広げて作られ、その形状から三味線堀と呼ばれた。一説に、浅草猿屋町(現在の浅草3丁目あたりの)小島屋という人物が、この土砂で沼地を埋め立て、それが小島町となったという。

浅草文庫(あさくさぶんこ)
徳川幕府の学問所と将軍の紅葉山文庫の書籍を蔵書とした、明治時代初期に東京に開設された明治期の一の公立